

# 研究主題 「知的障害特別支援学校小学部における「生きて働く知識及び技能」の 習得を目指した国語科の指導の充実 —学習指導要領が示す「段階」に基づく実態把握の指標と 年間指導計画モデルの開発を通じて—

東京都教職員研修センター企画部企画課  
都立高島特別支援学校 主任教諭 加嶋 みずほ

## 第1 研究のねらい

知的障害のある児童は、同一学年であっても個人差が大きいことから、特別支援学校学習指導要領には、学年ではなく、「段階」で内容が示されている。各教科の「段階」に示す内容を基に、教員が児童の知的障害の状態や経験等に応じて具体的な指導内容を設定するため、専門性や経験が必要であり、知的障害特別支援学校における授業づくりの難しさがある。

現行の学習指導要領では、知的障害特別支援学校における各教科の目標・内容について、育成を目指す資質・能力の三つの柱に基づき整理され、段階ごとの目標が新設された。また、学習指導要領解説各教科等編には、「児童生徒の知的障害の状態、生活年齢、学習状況や経験等を考慮して教育的ニーズを的確に捉え、育成を目指す資質・能力を明確にし、指導目標を設定するとともに、指導内容のより一層の具体化を図る」ことや「望ましい社会参加を目指し、日常生活や社会生活に生きて働く知識及び技能、習慣や学びに向かう力が身に付くよう指導する」ことの重要性が示されている。

本研究では、全ての教科等における資質・能力の基盤となる国語科に焦点を当てる。国語科における基礎的・基本的な知識及び技能の着実な習得は、他の学習の理解や日常生活における困難さの改善につながると考える。授業を通して児童が習得した知識及び技能を、様々な学習や生活の場面で活用できる「生きて働く知識及び技能」として身に付けていくことを目指す。

## 第2 研究仮説

特別支援学校学習指導要領が示す「段階」に基づく児童一人一人の確かな実態把握から、目標・指導内容を精選し、個々の学習状況に応じた指導を行うことで、児童が基礎的・基本的な知識及び技能を着実に習得し、様々な学習や生活の場面でも活用できるようになるであろう。

## 第3 研究の内容と方法

### 1 基礎研究

#### (1) 知的障害特別支援学校における各教科等の指導の現状と課題

先行研究及び文献等から、「学習指導要領に示された目標や内容と単元目標や指導目標が一致していない」などの課題が挙げられている。育成を目指す資質・能力を明確化することや各教科等を合わせた指導においても各教科等の目標や内容に照らして観点別に評価することなど、各教科等の指導の充実が一層求められている。学習指導要領改訂に伴い、教育課程を見直し、各教科等を合わせた指導形態から教科別の指導形態へ転換を図った学校や個別指導計画に観点別評価を取り入れた学校などがある。

#### (2) 知的障害特別支援学校における実態把握のための心理・発達検査等の指標

各種心理・発達検査及び特別支援学校で研究された学校独自の指標を調査した。幼児発達ス

ケール（K I D S）の理解言語領域、表出言語領域及び概念領域や遠城寺式・乳幼児分析的発達検査表（九州大学小児科改訂版）の言語領域など、国語科の実態把握のために参考となる指標が多数あり、学習指導要領が示す目標や内容を軸に、これらを整理することで、国語科の学習状況の把握に活用できると考える。

## 2 調査研究

都立知的障害特別支援学校5校、小学部教員187名を対象に、令和3年7月から8月に質問紙調査を実施した。

### (1) 国語科の指導についての各校の実態調査（対象 小学部学部主任）

指導の形態は、5校中4校は国語科、算数科を合わせた「国語・算数」、1校は教科別の指導（国語科）であった。児童の実態把握の方法は、「発達の段階を考慮できる」などの理由から、全ての学校が心理・発達検査を活用していた。

### (2) 国語科の授業づくりの意識調査（対象 小学部教員）

児童の国語科の実態把握（学習面）の方法は、「教材・教具の実施状況」、「学校全体で行っている心理・発達検査結果」の上位2項目に比べると、「学習指導要領に示されている目標・内容」を活用している教員は少ない結果となった。（図1）基礎的・基本的な知識及び技能の習得には、心理・発達検査等による実態把握に加え、児童が国語科のどの段階と想定されるか、各段階のどの内容を扱うことが適切か、国語科の学習状況を確認することが必要である。

また、国語科の授業づくりの過程で課題があると感じていることについて、「指導内容の選択」、「指導方法の工夫」の項目を挙げた回答者は7割を超え、授業づくりのどこに難しさを感じているのかが明らかになった。（図2）

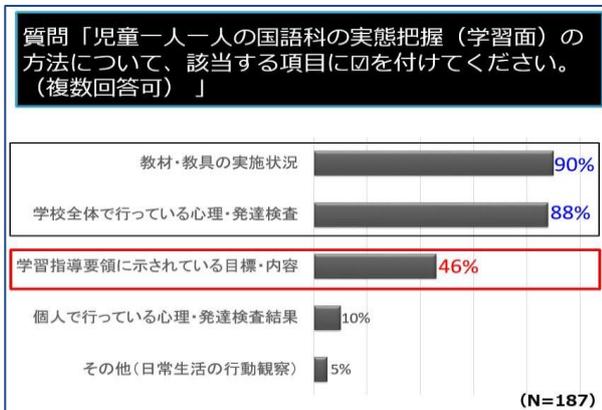


図1 国語科の実態把握（学習面）の方法

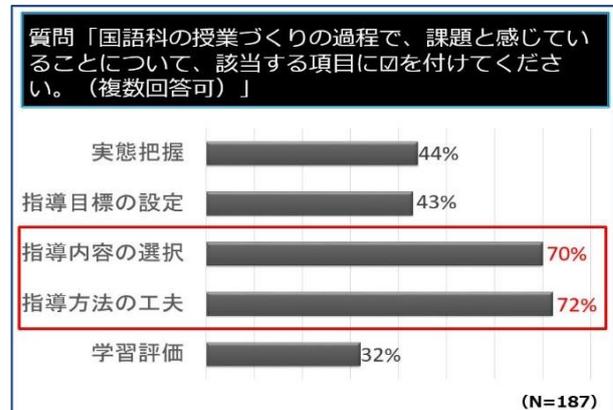


図2 国語科の授業づくりで課題と感じていること

## 3 開発研究

調査研究で明らかになった課題の解決につながる2点の開発物の作成に取り組んだ。

### (1) 学習指導要領が示す「段階」に基づく実態把握の指標となる「国語科習得確認表」

学習指導要領解説総則編及び各教科等編にある「目標・内容の一覧（国語）」を軸に、各種心理・発達検査等を参考にしながら、具体的な指導内容を段階的に示した。児童の国語科の学習状況を確認し、目標や指導内容を精選するための資料として活用できる。（図3）

### (2) 「指導内容の選択」や「指導方法の工夫」につながる年間指導計画モデル

小学部国語科1段階及び2段階について、具体的な指導目標の例、学習活動の案を示した。年間指導計画や単元計画の作成、授業づくりの参考資料として活用できる。（図4）

「知的障害特別支援学校小学部における「生きて働く知識及び技能」の習得を目指した国語科の指導の充実－学習指導要領が示す「段階」に基づく実態把握の指標と年間指導計画モデルの開発を通じて－

内容	
知識及び技能	<b>言葉の特徴や使いに関する事項</b> <b>(ア) 身近な人の話し掛けに慣れ、言葉が事物の内容を表していることを感じる。</b> <input type="checkbox"/> 口音に反応する。 <input type="checkbox"/> 特定の音や言葉に反応する。 <input type="checkbox"/> 日常生活で繰り返し使われる言葉に注意を向ける。 <input type="checkbox"/> 言葉と事物とが徐々に一致する。 <input type="checkbox"/> 要求を表す言葉が分かる。(ください、やってなど) <input type="checkbox"/> 話し方で感情を聞き分ける。
	<input type="checkbox"/> 口音に反応し、身振りや音声で表現する <input type="checkbox"/> 特 <input type="checkbox"/> 習得項目に印を <input type="checkbox"/> 付け、学習状況 <input type="checkbox"/> を把握する。 <input type="checkbox"/> 日 <input type="checkbox"/> 言 <input type="checkbox"/> 自 <input type="checkbox"/> 音
言葉	<b>(イ) 言葉のもつ音やリズムに触れたり、言葉が表す事物やイメージに触れたりすること。</b> <input type="checkbox"/> 言葉のもつ音やリズムに触れる。 <input type="checkbox"/> 日常生活で繰り返し使われる言葉掛け <input type="checkbox"/> 活動の終点を示す言葉 <input type="checkbox"/> 食べ物(ご飯、肉、魚など) <input type="checkbox"/> 果物(リンゴ、バナナ、ミカンなど) <input type="checkbox"/> 野菜(ニンジン、トマトなど) <input type="checkbox"/> 乗り物(車、バスなど) <input type="checkbox"/> 道具(コップ、帽子、靴など) <input type="checkbox"/> 身体部位(手、目、耳など) <input type="checkbox"/> 動物(犬、猫、鳥など)
	<input type="checkbox"/> 言葉が表すイメージに触れる。 <input type="checkbox"/> 日常生活で繰り返し使われる名詞の例 <input type="checkbox"/> 食べ物(ご飯、肉、魚など) <input type="checkbox"/> 果物(リンゴ、バナナ、ミカンなど) <input type="checkbox"/> 野菜(ニンジン、トマトなど) <input type="checkbox"/> 乗り物(車、バスなど) <input type="checkbox"/> 道具(コップ、帽子、靴など) <input type="checkbox"/> 身体部位(手、目、耳など) <input type="checkbox"/> 動物(犬、猫、鳥など)

図3 「国語科習得確認表」(一部抜粋)

活動名 『かおかおクイズ』	
活動内容	・指令役の児童が指令カードを見て、いろいろな表情を表現する。児童は解答カードからいるる表情の絵や「悲しい」「嬉しい」などの言葉カードを選んで貼ったり、言葉で答えたりする。 知識及び技能 思考力、判断力、表現力等 学びに向かう力、人間性等 気持ちなど、人の状態を表す言葉が分かる。 気持ちなど、人の状態を表す言葉が分かり、指令カードを見て、言葉や行動で表現できる。
使用教材・教具	・絵カード ・「怒る」「嬉しい」などの言葉カード ・鏡
活動イメージ	

図4 年間指導計画モデル(一部抜粋)

## 4 検証授業

### (1) 検証授業の概要

都立知的障害特別支援学校小学部第3学年の「国語・算数」で2段階想定の子童6名を対象に、単元「だれが どこで なにしている」(疑問詞の理解、場所の名称)を実施した。

まず、当該校で実施している心理・発達検査等による実態把握に加え、「国語科習得確認表(試案)」を活用して、学習状況を把握し、学習指導要領が示す「段階」に基づく目標・指導内容の精選を行った。

その後、個々の子童の実態差に対応した指導目標と評価規準を設定し、授業評価シートに評価の計画を記載した。授業ごとに授業評価シートを活用して、個々の学習状況を評価し、前時の学習状況を踏まえた指導を積み重ねた。

授業では、絵本の読み聞かせやタブレット端末を使用したクイズを通して、新たな知識及び技能を習得する場面と、習得した知識及び技能を活用する場面を設定した。また、他の学習や生活につながるように日常生活や社会生活と関連した内容を取り入れた。

### (2) 検証の結果

#### ア 「国語科習得確認表(試案)」と授業評価シートの活用の効果

「国語科習得確認表(試案)」を活用することにより、個々の学習状況に応じた目標・指導内容の精選と実態差に対応した指導目標・評価規準の設定ができた。

また、毎時間、授業評価シートを活用したことで、個々の学習状況に応じて、目標、指導内容、手だてを調整できた。授業評価シートを担当と共有したことで、「日常生活の指導」や個別の「国語・算数」など、他の学習と関連した指導が実現し、子童の基礎的・基本的な知識及び技能の定着や日常生活場面における習得した知識及び技能の活用が見られた。

#### イ 子童の変容

検証授業終了後、授業評価シートから、個々の子童の到達状況をまとめた。(表1) 新たな知識及び技能を習得する場面と活用する場面を設定したことにより、前時に習得した知識及び技能を次時で生かし、疑問詞「どこ」、「だれ」を使った質問に、場所や人物の名前を答えることができた子童がいた。さらに、全ての子童が新たに学習した知識及び技能を活用して、ゲーム性のある活動に取り組むことができた。また、日常生活や社会生活と関連させて学習することで、経験や既存の知識及び技能と学習内容を関連させる様子があった。(表2)

表1 実態差に対応した段階的な単元目標と個々の到達状況

ア 知識及び技能		イ 思考力、判断力、表現力等		ウ 学びに向かう力、人間性等	
①「だれ」、「どこ」などの言葉や場所の名前を聞いたり、読んだりする。		①質問を聞いて、カードを取ったり、カードや具体物を分類したりする。		①ゲームの内容が分かり、すすんで取り組んだり、指示役などになって質問の言葉を使ったりする。	児童B、E
②「だれ」、「どこ」などの言葉の働きに気づき、教員の言葉を真似して答える。	児童E	②質問を聞いて、絵や文から「人物」や「場所」を探して、カードを取る。	児童B、E	②自らの質問の言葉を使ったり、「人物」や「場所」について気付いたことを言葉や行動で伝えたりする。	児童A、C、D、F
③「だれ」、「どこ」などの言葉の働きや場所の名前に気づき、言葉や行動で答えようとする。	児童A、B、C、D、F	③「だれ」、「どこ」などの言葉の働きに気づき、絵や文から「人物」や「場所」を探して、カードを取る。	児童A、C、F		
④「だれ」、「どこ」などの言葉の働きや場所の名前が分かり、正しく言葉や行動で答える。		④「だれ」、「どこ」などの言葉の働きが分かり、絵や文から「人物」や「場所」を探して、正しいカードを取る。	児童D		

表2 個々の児童の学習記録（授業評価シートより）

<p>【児童C】第1時、授業の初めは、質問に答えることができなかったが、後半は、「場所」や「人物」について答えようとする様子があった。第2時以降は、前時に学習したことをすすんで答えていた。第6時には、絵本を見て、自ら疑問詞「どこ」を使って教員とやり取りしようとする様子があった。</p> <p>【児童D】第1時は、疑問詞の言葉の働きが分からず、解答例を確認していた。学習を積み重ねることで、絵本の内容や学習した「場所」の名前について、言葉で答えることができる機会が増えた。「日常生活の指導」時、経験した出来事について、担任が「どこ」という言葉を使って質問すると正しく答えることができた。</p> <p>【児童F】第1時は、疑問詞の言葉の働きを理解して発言していたが、絵本から読み取った内容を答えることは難しかった。学習を積み重ねると、絵本に登場する「場所」や「人物」について答えることができる機会が増えた。日常生活では、経験したことから考え、答える様子があるが、事実と異なることもある。</p>
---

### ウ 「生きて働く知識及び技能」の習得を目指した授業づくりの手順の整理

検証授業のPDCAを基に、2点の開発物の活用方法や授業づくりの手順を整理し、授業づくりのガイドとなるように、「5つのプロセスでつなぐ『生きて働く知識及び技能』の習得を目指した授業づくり」としてまとめた。（図5）



図5 5つのプロセスでつなぐ「生きて働く知識及び技能」の習得を目指した国語科の授業づくり（一部抜粋）

## 第4 研究の成果

知的障害教育の国語科の指導の充実につなげるため、「国語科習得確認表」と年間指導計画モデルを開発し、開発物の活用方法や授業づくりの手順を「5つのプロセスでつなぐ『生きて働く知識及び技能』の習得を目指した国語科の授業づくり」としてまとめた。

検証授業では、図5に示した5つのプロセスで授業づくりを行うことで、個々の学習状況に応じた指導、他の学習と関連した指導が実現し、児童が基礎的・基本的な知識及び技能を習得することができた。習得した知識及び技能を生活の場面で活用できた児童もいた。

## 第5 今後の課題

習得した知識及び技能を「生きて働く知識及び技能」に発展させるためには、授業場面に限らず、様々な学習や生活の場面などの多くの機会を通して活用することが重要である。そのため、他教科等と関連させた効果的な指導について、実践を通して追究する。